



Title	Negative Idealism of Percy Bysshe Shelley : His Self-Revisionism toward "The Triumph of Life" [an abstract of dissertation and a summary of dissertation review]
Author(s)	白石, 治恵
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第13713号
Issue Date	2019-09-25
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/76334">http://hdl.handle.net/2115/76334</a>
Rights(URL)	<a href="https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/">https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/</a>
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Harue_Shiraishi_abstract.pdf (論文内容の要旨)



[Instructions for use](#)

# 学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名：白石 治恵

## 学位論文題名

### NEGATIVE IDEALISM OF PERCY BYSSHE SHELLEY: HIS SELF-REVISIONISM TOWARD “THE TRIUMPH OF LIFE”

（パーシー・ビッシュ・シェリーの否定的理想主義：「生の凱旋」に至る自己修正）

#### ・本論文の観点と方法

本論文は、英国ロマン派詩人パーシー・ビッシュ・シェリー(Percy Bysshe Shelley)の創作における動因を否定的理想主義(negative idealism)とし、いかに初期からの詩と散文創作に反映されているかを検証し、否定と創造を繰り返しつつ自己修正を重ね到達した彼の理想主義が最後の作品“The Triumph of Life”(以下 TL)に結実したことを論じる。シェリーの理想主義はプラトン主義を基とし、「神は人語では表し得ない」とする否定神学的認識を有する否定的な理想主義である。彼は究極の理想である詩的靈感をいかに原型に近く人語で表し得るかを、生涯模索し挑戦し続け、先行作品とは主題、構成、表現等において全く異なる絶筆の TL で、否定が表す様々な手法を用いて、語り得ないものを語る言語表現の限界と可能性を示すに至ったと、本研究は主張する。

方法としては、作品、書簡、日記、および同時代人の証言などの第一資料を基に、シェリーの創作時における心理を丹念に拾い、かつ同時代の思想及び文化からの影響を分析しつつ、先行研究の各主題における議論を踏まえて、否定的理想主義作品を解釈することで、初期から最後の作品に至る理想追及と否定の連鎖による自己修正の発展を体系的に精査する手法をとっている。また TL までに追求された理想が、TL において否定され修正されていることを、先行作品との比較により解明している。

#### ・本論文の内容

本論文は2部10章から成り、それぞれの部は TL 以前と TL の分析に分かれる。第1部では5つの観点から、TL に至るまでの否定と創作の繰り返しによる理想追及が分析されており、第2部では先行作品との比較によって TL で試みられている新たな理想的表現方法を解析している。両部に通底するのは、プラトン主義を基に否定神学的要素を加えた、新規的な否定的理想主義という視座である。

第1部第1章では必然論を分析する。Queen Mab が書かれた1812年は彼が18世紀唯物主義の強い影響下にあった時期であり、正しい選択は良い結果を必然的にもたらすという法則を、宇宙を支配する存在として絶対化することにより、必然論を正義を行う者としての自己肯定の根拠としている。他方 Alastor が書かれた1815年には、人生の辛酸と病気による死の淵からの生還により必然論への絶対的信頼が否定されていた。必然論は一つのルールに過ぎないと修正されていることを、Alastor の主人公が必然により罰せられるも肯定的に描かれていることから証明する。

第2章はシェリーの菜食主義を分析する。彼は少年の頃から肉食を嫌悪していたが、当時の時代思潮である科学に基づく菜食主義をその自己正当化の根拠として採用し実践した。本論ではさらに当時の呼称「ピタゴラス的食餌法」から、ピタゴラス派が信じるオルフェウス教の思想（靈魂不滅・輪廻転生）、人間の転生を想像する動物食への嫌悪、さらに詩における人肉食表現の多用等から、肉食を究極まで追求すると人肉食を無意識に連想することがシェリーの菜食主義を促進したとする。

第3章は、1818年以降の様々な芸術作品に触れて、彼の美学が「知的美を讃える歌」に見られる初期の受動的美意識から、創作を駆り立てる恐怖の美へと修正されたことを論じる。特にメドゥーサの絵を言語化したシェリーの詩を分析し、彼自身が絵画から新たなイメージの創作へと駆り立てられたように、詩の読者も詩から新たなイメージを想像する、インタラクティブな言語表現が試みられていることを論証する。

第4章では、彼の宗教と神話の関係を分析する。初期のシェリーは、*Necessity of Atheism* 等に顕著のようにキリスト教の非科学性と専横に対する嫌悪が激しかったが、聖書をギリシャ神話のように神話化して客観視することにより、キリストを一人の偉人としてとらえ、その美德を自身の作品に反映するほど、受容可能なものへと修正されたとする。

第5章では、詩作品におけるヒロイズムの変遷を分析する。シェリーの英雄的主人公像は、人々の救済のために自己を犠牲にする改革者と、他者を顧みずただ自己の理想を追求し孤立してゆく芸術家の二つのタイプに分類される。この二者が時には片方、時には融合された形で修正されて登場する変遷を、*Queen Mab* から *The Cenci* に至るまでの主人公像から分析する。

第2部ではTLの分析がされる。第1章でその批評史を踏まえ、第2章ではこの詩が散文“On Life”の思想的反映であることを検証し、詩中の群衆の描き方からシェリーの認識論を考察する。群衆は先行作品では常に救済の対象として描かれていたが、TLでは無目的・無自覚に、興奮し滅んでゆく。同時に群衆を見ているナレーターも対象を理解せず自覚もない。「無理解・無自覚」という否定的共感により、シェリーがそれまで信条としていながら成し得なかった博愛主義の成就（対象との共感）に至ったと論じる。

第3章では生の凱旋車の捕囚、特にその筆頭のナポレオン観の修正を、先行作品等との比較から考察すると共に、捕囚の解説をするルソーから、理想的知者の否定的描写を読み取る。同時代人としてナポレオンの盛衰を見るにあたり、初期は好戦的な独裁者としてのナポレオンを嫌悪してきたが、その失脚および死を経て、彼のナポレオン観は時代が必然的に生み出した寵児へと修正され、同時に初期の絶対的な必然論も修正されている。歴史から学び、時代と生を再定義することが詩人の役割であることをTLが示しており、その観点を与えているルソーを、知の象徴として描き、そのルソーを否定的に描くことにより、さらにそれを凌駕するものを想起させる詩人の否定神学的手法を分析する。

第4章では、“shape all light”に注目し、シェリーの否定的理想的女性像を考察する。先行作品における女性像は、主人公の靈感を刺激するミューズと、主人公を破滅させる悪女の2つのタイプに明確に分かれていたが、TLに描かれた女性像は、詩人の否定、知の否定、自然の否定、および名の否定を示している。かつての女性像は修正され、理想的女性像とは、次の創作を促すための破壊者であり、最高に美しい自然を凌駕するほどの美を持ち、イメージの限定を避けるための抽象性を保つ匿名となっていると説明する。

第5章では、エンディングの否定の意味は、英雄的主人公の不在と共に新たな言語の可能性の提示するためであることを論じる。この詩にエンディングがなく断片として出版されたのは不慮の死によるとする定説に反し、本研究ではシェリーの「未必の故意」を読み取り、意図的な未完であることを主張する。第一の理由は主人公の否定＝不在である。それにより詩の解釈とイメージの限定を彼は意図的に避けている。第2の理由は妻の日記から海難事故が想定可能だったこと。この詩の執筆中断の時期を鑑み、先行作品にも散見されるように、詩の中断に未必の故意があったと想定される。このようにエンディングを否定することにより、詩の解釈及びイメージの限定を避け、読者の想像力を最大限に利用することにより、言語の限界を示しつつも言語の枠組みを超えた理想的な言語表現が可能になったことを彼は示していると本論は主張する。TLにおけるシェリーの否定的理想主義は、シェリーの語り得ないものを語る永遠の努力であると、本研究は結論付ける。